

必修外国語の履修について

社会学部 新入生の皆様へ

社会学部では、英語6単位（1年次4単位、2年次2単位）に加えて、英語以外の外国語（初修外国語）2単位（1年次2単位）を必修としています。学べる言語はドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語の4カ国語で、入学するみなさんはこの中から1カ国語を選択し、1年生の4月より履修することになります。

4カ国語の中からどの言語を選択するかについては、説明をよく読んで、希望する言語を第1希望から第4希望まで選択してください。

みなさんの希望を重視しますが、希望が集中した場合は、第2、第3、4希望に選択した言語になることもあります。

選択した言語の結果は、入学後、時間割登録の際にWEB履修登録画面に表示されます。

確定した言語は変更することができませんので、よく考えて選択してください。

1. セメスター制について

本学では、セメスター制を採用しています。セメスター制とは、半年を1学期とするもので、1学年を第1学期（4月～9月）、第2学期（10月～翌年3月）の2学期に区分し、以後4学年まで計8学期にわたって教育課程（カリキュラム）の編成を行うものです。

学年、学期、セメスターの関係は次のとおりです。

第1学年(1年次)		第2学年(2年次)		第3学年(3年次)		第4学年(4年次)	
第1セメスター (第1学期)	第2セメスター (第2学期)	第3セメスター (第1学期)	第4セメスター (第2学期)	第5セメスター (第1学期)	第6セメスター (第2学期)	第7セメスター (第1学期)	第8セメスター (第2学期)

2. 各外国語の開設科目および開講時期について

各外国語は、以下のセメスターに開講します。必修科目はその定められたセメスターに履修しなければなりません。また、選択科目は各自の学修計画によって、定められたセメスター以降であれば自由に履修することが可能です。

学年・セメスター		第1学年(1年次)		第2学年(2年次)	
		第1セメスター (第1学期)	第2セメスター (第2学期)	第3セメスター (第1学期)	第4セメスター (第2学期)
英語	必修科目	1(A)・1(B) (各1単位)週各1回	2(A)・2(B) (各1単位)週各1回	3 (1単位)週1回	4 (1単位)週1回
	選択科目	セミナーA1・G1 (2単位)週1回	セミナーA2・G2 (2単位)週1回	セミナーB1・C1・D1・E1・F1 (各2単位)週各1回	セミナーB2・C2・D2・E2・F2 (各2単位)週各2回
初修外国語	選択必修科目	IA (1単位)週1回	IIA (1単位)週1回		
ドイツ語 フランス語 中国語 ロシア語	選択科目	IB (1単位)週1回	IIB (1単位)週1回		

3. 初修外国語の学修意義

なぜ英語以外の外国語を学ぶのでしょうか？英語が国際的な標準言語としての地位を揺るぎないものになっている現代に、わざわざもう一つの言語を大学で履修する必要があるのでしょうか？新しい外国語を学ぶことに時間を費やすぐらいなら、その時間を使って中学、高校で学んできた英語をさらに磨いた方が、就職活動をはじめとした将来の生活にプラスになるのではないかと考える方も多いかもかもしれません。

確かに英語を学ぶことは大切です。社会学部では、英語についても必修の授業に加えて、より英語力を伸ばすためのいくつかの授業を選択科目としてみなさんに提供しています。IT 革命、グローバル化といった言葉が既に流行語ですらなくなった現在、英語は「ひよっとすると使う機会もあるかもしれない」豆知識ではなく、社会的活動のなかでどうしても必要な道具（ツール）であり、英語に習熟することは、そのまま社会における活動能力を身に付けることでもあるからです。

しかし、21 世紀の世界は、果たして英語というたった一つの言葉、そして英語を話す人々が築いてきた文化を核として、一方的に統一されていくのでしょうか？世界中の誰もが英語によってコミュニケーションをとる時代は、すぐそこに来ているのかもしれませんが、でも、人々がそれぞれの民族の言語を通して築き上げてきた文化や伝統は、おそらくこれから先も消え去ることはないでしょう。そして、英語を使うことで人々の交流が容易になった分、数々の文化が生みだした固有の感じ方、考え方の違いは、現代ではより明確なかたちで私たちの前に立ちはだかっているように思われます。言葉が通じ、意思が理解しあえるからこそ、実際のコミュニケーションのなかで「なぜ同じ考え方をしてくれないの？なぜ私の気持ちを分かってくれないの？」と思わされる場面に、私たちは今まで以上に出会うことになるのです。

初修外国語を必修とするのは、こうした現状が理由となっています。新しい外国語を一つ学ぶことは、世界の多様性を理解し、社会のさまざまな局面であらわれる文化的差異への認識をよりよい方向に向けるための第一歩です。こうした努力を学生のみなさん一人ひとりが積み重ねていくことが、これからの社会にとって必要であり、また社会学という、現代社会に直結する学問を学んでいくみなさんの今後の学習にも大きく役に立つであろうと、私たちは信じています。

また、社会学部では、初修外国語に関しても、選択必修の2 単位（IA、IIA）に加えて、選択科目としてさらに2 単位（IB、IIB）、2 年次以降学習を継続したいと思うみなさんのためにセミナー IA・IIB（各2 単位、合計4 単位）を開講します。IB、IIB は必修科目と同時に受講し、週1 回の授業ではとても足りない部分を補強することを狙いとしたものです。「選択必修だけでもたいへんなのに、その上もう一科目だなんて」と思うかもしれませんが、同じ一つの言葉を二つの側面からアプローチするためのカリキュラムですから、二つの授業を同時に受講するからといって、学習上の負担は決して大きく増えたりはしないことでしょう。外国語を学ぶためにはできるかぎり多くの時間を割くことが大切ですから、週1 回しか受講しない人よりも、週に二つのクラスを受講する人の方がより早く、深くその言葉に習熟できることにもなるはずで、できるだけ多くの方がこの開講形態を利用して、効率的に外国語を学び、外国語の魅力に目を開いて欲しい、私たちはそう考えています。

以下の各初修外国語の紹介をよく読み、希望する言語を第1 希望から第4 希望まで選択してください。

4. 各初修外国語の紹介

(1) ドイツ語

ドイツ語はドイツ連邦共和国とオーストリアのほか、スイス、リヒテンシュタイン、イタリア北部などの一部地域でも話されています。ドイツと聞いて思い浮かべるのは、食べ物ならソーセージとビール、スポーツならサッカー、歴史ではユダヤ人問題やヒトラー、哲学者ならマルクスやカント、音楽ならベートーヴェン、あるいはテクノ・ポップの先駆けとなったクラフトワークかもしれません。2000年代のドイツは、東ドイツ時代の製品（車：トラバント、工業デザイン、信号機）や文化（ロック、ジョーク、文学）がブームになったり、ナチス・ドイツを題材とするドイツ映画が世界的に評価されたりなど目が離せません。一方で、EUの政治や経済をリードしながらも、移民問題や極右政党の台頭に悩まされている現状もあります。

ドイツ語を学ぶメリットはたくさんありますが、そのなかの2つを紹介します。ひとつ目は、英語など外国語が苦手だと思っている人にこそドイツ語に触れてほしいということです。ドイツ語は「論理的」な言語です。だからこそ初学者にもわかりやすく、「なぜ？」という疑問にも納得のいく答えが必ずあります。英語を勉強していて「慣用句だから覚えて！」と言われたことはありませんか。ドイツ語は文法と文構造さえ理解すれば、パズルを解くようにスルスルと頭にはいってきます。むしろドイツ語を勉強することが英語力の強化、あるいは母語である日本語を構造的に把握するきっかけになりうるのです。

ふたつ目は、単語には一対一対応の「意味」だけでなく「その単語がまとう雰囲気」があるということです。たとえば、ドイツ語の形容詞「ゲミュートリッヒ (gemütlich)」は「心地よい」という日本語に訳されます。ところが、わたしたち日本人が思い描く「心地のよい」とドイツ人にとっての「ゲミュートリッヒ」は少し違うようなのです。ドイツ語の「ゲミュートリッヒ」は、心や気持ちが落ち着いてリラックスできる空間にいることを表すのです。試験勉強で必死に覚えた「単語 2000」を頭に叩き込むだけが言語を学ぶことではありません。その国の人たちが自然、人間、社会をどう認識し、捉え、それを言語化しているかを学ぶことこそが、言語を身につける醍醐味ではないでしょうか。

第二外国語の勉強は日本人という視点から離れて、もうひとつの「ものの見方」を発見する第一歩でもあります。言語という扉からドイツの面白さを一緒に体験してみませんか。

(2) フランス語

テレビに流れるCMでは、フランス語が用いられているものを多く目にします。ネイティブの人たちの生活を描いたものであったり、フランス語を学ぶ日本人を主人公にしたものであったり、それらのCMフィルムが採り上げるシチュエーションはさまざまですが、以前なら日本語だけ、あるいは英語を用いて描かれたような情景でフランス語が聞こえてくるのが、だんだんと増えてきているようです。なぜ今、フランス、あるいはフランス語への関心が、このようなかたちで私たちの身近に、静かに、けれども着実に持ち上がってきているのでしょうか？

かつて1960～70年代には、フランスといえば芸術の国として、文学、美術、音楽、さらには映画といった側面から興味を覚え、フランス語を学ぶようになった人が多かったものです。現在でももちろん、そうした分野におけるフランスの活躍は大いに注目を浴びています。しかし、こんにちの関心のあり方は、その頃とは大きく異なっているような気がします。かつての「芸術の国フランス」への憧れは、芸術を生み出すためのパワー、精神の力強さへの希求がその根底にありました。今、テレビなどのマスメディアにあらわれるフランスのイメージは、例えば食文化の豊かさ、余裕をもって日常の出来事に相対する生活様式の味わい深さ、といった点に焦点があたっているように思います。日本社会が高度成長期、バブル期を

経て大きな変貌を遂げたことで、私たちが生活のなかで求めるものも大きく変わってきました。そう、現代の私たちがフランスに求め、憧れるもの、それは、「より強く、より高く」ではなく、「よりよく、より味わい深く」人生を生きるためのモデルであるのかもしれませんが。

楽しいことも、楽しくないことも、全てをひとまとめにして人生を味わい尽くすフランス文化の懐の深さを、その一端なりとも、フランス語の美しい響きとともに伝えることができればさいわいです。

（３）中国語

中国語は中国人が話す言葉だろうと考える人が多いでしょう。ところが、中国語と言っても上海の人は上海語を、福建の人は福建語を、広東や香港の人は広東語を、北京の人は北京語を話しますからどの言葉が本当の中国語なのだろうかと疑問に思う人も多いはずです。中国の各地方で通用しているこれら地方の言葉は互いに意思疎通すら不可能なまったく違う言葉です。

この中の北京語だけは学校教育を受けた中国人なら誰でも知っている言葉です。1949 年以来、中国ではずっと北京語を普及してきました。テレビ、ラジオ、映画でも北京語を使い、政府の重要会議などの場でも北京語を使用し、学校教育でもなるべく先生が北京語を話すようにしてきましたから中国のどの地域に行っても北京語だけは通じます。中国では北京語を「標準話」、「普通話」とも言います。普通に誰もが話す言葉、標準的な中国語であるという意味です。日本のテレビやラジオの中国語講座はこの標準的な中国語を教えているわけです。龍谷大学でみなさんはこの標準的な中国語を勉強することになります。

中国語は難しい、発音も難しいし、文法も日本語に似ていないから大変、という話をよく聞きますが、中国語も外国語ですから発音も文法も日本語とは違います。しかし、勉強すればするほど日本語に似ている部分が多いことに気づくはずですが、例えば、言葉の順番が英語に似ているとありますが、全体的にはむしろ日本語に似ています。1 年間あるいは 2 年間学習すれば、このような言葉の特徴に気づいたり、中国文化に対する理解も深まるはずですが、また、中国語に接することで自分の潜在的な能力に気づくようになるかもしれません。

中国語は実践的にもますます使い道が広がっている言葉です。どこまで出来るかは自分次第でもありますが、大学では皆さんのニーズに答えられるプログラムを組んで待っています。

（４）コリア語

コリア語（韓国・朝鮮語）は日本人からすると外国語です。ただ、日本やコリア（韓国・朝鮮）ではずいぶん前から漢字を使ってきましたし、アルタイ語という共通点も持っています。このような点で二つの言語は地理的にも歴史的にも一番近い言語です。

言語は『話』と言葉を表現する『文字』で構成されていますが、言葉はあるが、それを適当に表現する文字のない場合があります。コリア語（韓国・朝鮮語）もずいぶん前から使われてきましたが、コリア語（韓国・朝鮮語）を表現する文字はあまり古くありません。コリア語（韓国・朝鮮語）を表現する文字の名前は「ハングル」です。現在、韓半島（朝鮮半島）で使われている「ハングル」は 1443 年に初めて作られた文字です。この「ハングル」がなかった時は、日本のように中国の漢字を借りて表現するとか漢字を利用してコリア語（韓国・朝鮮語）のように使ったりしていました。「ハングル」は、子音（ㄱ, ㅋ, ㆁ, ㄷ, ㅌ, ㄴ, ㄹ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㄴ, ㄷ, ㄹ）と母音（ㅏ, ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅗ, ㅛ, ㅜ, ㅠ, ㅡ, ㅣ）に分けられ、この二つを組み合わせで文字を作っています。この子音と母音の組み合わせに完璧に慣れれば文字を読むことが可能になります。文字の意味も中国から入って来た漢字語はコリア語（韓国・朝鮮語）や日本語と共通の部分が多いです。日本人は漢字に慣れていますからより易しくコリア語（韓国・朝鮮語）を習うことができます。

日本人が自分自身を理解して正しく見るためには、近くの地域から把握しなければなりません。アジア人である日本人として、先に隣りの国である韓国・朝鮮が分かればと思います。

コリア語（韓国・朝鮮語）は韓国・朝鮮文化を理解する窓です。コリア語（韓国・朝鮮語）を通じて韓国・朝鮮文化が分かって自分自身の真正な意味を見つけてみてほしいと思います。

5. プレイメントテストについて

英語力の測定及び英語のクラス分けのため、英語の試験（Placement Test）を実施します。この試験は、社会学部の学生全員が受験することが義務付けられています。詳細については、改めてご案内致します。